



獨逸に於ける幼稚園思想

米國 エム、ヴィ、オツシー、

幼稚園は其故郷なる日耳曼では却つて米國よりも盛んでないと云ふことは屢聞いたことであるが記者が昨夏の歐洲漫遊に於て觀察したる所に因ると是は偽りでは無い様であるそして獨逸の教育家は一般に幼稚園を以て公共教育の範圍内に置く可きものとは認めて居ない様である。何故獨逸が斯うであるかと云ふことは獨逸の學校事業の性質を觀察すると自ら氷解することが出来る。

一體獨逸と云ふ國は記者の見たる歐洲中では一等の軍國であるから其學校には自然頗る軍事的的精神が反映して居る。従つて獨逸の様な嚴格な教授をして居る教室は恐らく世界中にはあるまいと思ふ。朝なども一体早くて亞米利加の子供がまだ寢

床の中にある頃に、もう獨逸では始めて居る。そうして悉くではないが一部の兒童は夕刻迄も教授を續けて居る、某父兄が余に語つて云つた言葉に子供は學校に出掛けると同時に一瞬の自由も許されぬ。

と云つたことがあるが、是で以て獨逸の學校の様子が知れると云ふものです。そして彼等小供は學校に居ない時には家庭に於て種々の日課を課せられることになつて居る。少くも文法の稽古とか又は特殊の學校へ行かねばならぬ様にしてある。是は何故かと云ふに獨逸の若者と云ふものは生涯の最良な一部分を以て軍隊的生活を過ぎなければならぬ様になつて居るからして教育の全部を受けんとするには是非大忙ぎをしなければならぬからである。従つて彼等は物と云ふものは決して悠々と出来ぬものだと思ふて居る。他方には若し我々セコンダリースクール位の教科に稍適するものがあると一年間の軍役から除かれることになつて居る、是が獨逸の少年をして極力奮發せしむる非常な戦因である。斯る感じは何處の學校でも感ぜら

る、ことで教師は又絶え間なく斯ふ云ふ風に生徒を勵まして居る、神經的でもイヂワルのでもなく頗る獎勵的に、又獨逸の學校では鈍と不仕合とに對して猶豫しないから時間の空費を見ることは出来ない。又快樂と云ふ様な側に時間を用ゐて居ることは全くない(遊戯にも、息をつく時もない位で)又獨逸では子供は黒板へ向つて悠々と歩むと云ふことはない、凡べて驅け足である。そして彼等の仕事は終ると云ふと瞬時に彼等の席に復する。伯林の子供は慰み時代と呼ばれた時代でも學校に居る間は決して遊ぶことをしない。飛びもしない、驅けもしないでほとんしく中庭の廻りを歩いて居る。伯林の學校と我米國のニューヨーク、ボストン、シカゴ等に於けるものとの此コントラストは著しき印象を我米人に與へて居る。伯林の學校教師は一般に兒童が自分自身で選んだ競技や遊戯で感さむよりは系統的に組立てられた体操の中に其慰を見出す様にするのが訓練上必要なことだと考へて居る。

一體軍隊的政治と云ふものは命令に服従すること、權力を尊敬すること、の上になり立つて居るから是が爲めに個性の發現と云ふものは極めて小なるか若しくば抹さつされてしまふ、從つて生徒は自分の意見を述べて見るとか或は自分の信ずる所を行ふて見ると云ふことが力弱くなり躊躇する様になるものである。絶えず斯う云ふ風に進んで行く結果は凡べての行が控へ目になるのは止むを得ないと云はねばならぬ。是が獨逸の諸學校に於ける著しき傾向である。斯様な處では幼稚園が盛んにならないのも無理はないと思ふ。何故と云ふに後の軍隊的訓練法に對して此幼稚園の教育法と云ふものは何う考へても餘りに柔らか過ぎて居り溫和過ぎて居るからである。其上に以て來て幼稚園の教育法は個性の價値を餘り大にし過ぎる位に重んじて居る。且又幼稚園は兒童を鍛練し様とするよりは兒童を幸福ならしめ様と努めて居る。是が先づ第一に獨逸思想と衝突する所である。實に亞米利加の幼稚園を彼獨逸人に見せたら不思議に感ずるに違ひない。記者

も伯林で一二研究したのが非常な違ひである。獨逸の教師は皆我亞米利加の幼稚園を以て兒童に對して餘り柔らか過ぎて、そして餘り感情的である。そして子供が自然、自負のになり威張ることを覺える結果は元來負ふ所の權力にも服従することが出来なくなると斯ふ思ふて居る。

議論は兎に角も實際我國の幼兒は獨逸の子供等に比して大に自由で且權力と云ふものに就ては然のみ注意をしないと云ふことは確かな事實である。併し彼等は決して不遜でもなく不従順でもない。唯如何なる時機に敬意を表す可きかと云ふことに於て心得を與へられて居ないと云ふ丈である。蓋し獨逸の子供の周圍は敬意を表さなければならぬ人々で充ちて居るし我國の子供は皆此反對である」と云ふことが是等の原因でもあらう。

獨逸人の多くは吾等の行ふが如き幼稚園は單に我國少年の既有的欠點を更に劇しからしむるものであると考へて居る。

(湘南生譯)

●處女時代に満足を與ふるの害

處女時代には家政教育と技藝教育が第一で、裝飾は淡白清潔を保つて居れば澤山であるのに、日本處女の裝飾に至つては實に贅澤の限りを盡し、何一つ親の手助けをせぬ小娘に、自分不相應の帯を占ませ、大した裝飾を頂かせ人中へ出して母親が得々と誇つて居る。小娘自身も追々増長して未だ指輪の宜いのが欲しい、時計も欲しいとあまえ出す。母親は自己を節し苦心慘愴して小娘に満足させ、賣物だから花を飾らねばならないと理屈を付けて居る、いやはや沙汰の限りちやありませんか。賣物に花を飾ると云ふのは男子の目を瞞かせるやうなもので斯様な賣物を買入れた男こそ英雄、實家で贅澤癖が着いて居るから、亭主の仕向が萬端不満足でぶり／＼する、始末にいけない代物が與へるのです。

西洋では處女に不満足を與へて置くのが、結婚後を愉快ならしむる元素であると致してあります。處女時代に衣服裝飾等を極質素に抑制されて居るから、結婚後良人が少しの物でも買つてくれれば非常に有難く嬉しく感じて大切に保存するのです。西洋婦人の許へ參ると是は旅行中の良人が贈つた繪巻書ですなうてよく見せられる事がありますが、吾々が見ては詰らぬ些細の物迄も大事さうに秘藏して居る所を見ますと、如何に満足しつゝあるかが分ります。日本の處女のやうに満足に結婚前に濟して了ふと、他日良人から少しやそつとの物を貰つたつて親の半分にも追付ず、萬事親の有難味ばかりを思ひ出して、始終不愉快不満足に堪へない。こゝ等の原因が餘程夫婦の交情に關係を及ぼすやうであらうと思はれます。短い處女時代に不満足を堪へさせて、永遠に愉快に暮らせると云ふ事は、世の親御達に宜しく慮つて貰ひたいのです。(文學世界)